

# 看護大学生の社会人基礎力の年次変化から見た キャリア形成支援内容の検討（第1報）

切 明 美 保 子・壬 生 寿 子

## I. はじめに

急速な少子高齢化や医療の高度化専門化を背景に、社会の看護へのニーズも多様化しており、専門的な知識や技術の質の高さが求められている。経済産業省の推進している社会人基礎力は「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」と定義され、社会人基礎力の育成と評価のための「社会人基礎力評価基準シート」を活用することで、必要とされる能力が可視化され、定期的なチェックは学ぶ目的や専門職を目指す自覚を促すことにつながると示されている<sup>1)</sup>。看護の場面においても、看護の対象は患者やその家族と多岐にわたり、かつ、医師など多職種との連携も必須であることから、看護師も学生時代から社会人基礎力を身につけることが求められる<sup>2)</sup>。社会人基礎力に関する看護大学生を対象した先行文献をみると、看護実習との関連<sup>3)</sup>、自然体験学習との関連<sup>4)</sup>、被災地のボランティア活動との関連<sup>5)</sup>、アルバイトとの関連<sup>6)</sup>においても、社会人基礎力を向上させる効果があることが示唆されている。他者とのかかわりが基本となる看護師は、対人関係が重要な職業である。高齢社会を迎えた近年では、医療の高度化などにより、必要なケアを提供するためには、多くの職種との連絡調整、協働が必要であり、看護師に求められる役割も増大している。また、看護学生が卒業後、就職してからリアリティショックを受けるな

ど、離職につながっていることも社会問題になっており、在学中から社会人基礎力を身に付けられるようなキャリア支援を行っていくことが重要である。しかし、看護基礎教育においては、実習そのものが職業理解につながると理解されてきた背景があり、キャリア教育が重要視されていない現状がある<sup>7)</sup>。そのため、在学中の社会人基礎力の変化を把握し、教育やキャリア支援に反映させていくことが卒業後の職場適応を促進させることにつながると考える。

そこで本研究は、看護大学生の社会人基礎力自己評価の年次変化から、キャリア形成のための支援内容を検討していくことを目的とし、第1報では、1年次の年次変化の現状について報告する。

## II. 研究方法

### 1. 研究対象及び調査方法

1) 研究対象：A大学看護学科に在籍している1年次生69名。

2) 調査方法：1年次前期（6月）と後期（2月）の年2回、調査の主旨を説明し、了承が得られた後、調査を実施した。調査に使用した調査票は①社会人基礎力自己評価表（前期と後期）②自記式質問紙調査票（後期）であり、同日同時間帯に配布し、最初は自己評価表を記入、その後自記式質問紙調査票を記入する方法とした。調査票の提出をもって同意したと判断した。

## 2. 調査期間

平成28年6月～平成29年2月

## 3. 調査内容

### 1) 社会人基礎力自己評価表

経済産業省の社会人基礎力育成の手引き—日本の将来を託す若者を育てるために—から始める社会人基礎力の育成と評価の「社会人基礎力レベル評価基準」を参考に、「社会人基礎力自己評価表」を作成した。『前に踏み出す力』『考え抜く力』『チームで働く力』の3つの能力と、それを細分化した「主体性」「働きかけ力」「実行力」「課題発見力」「計画力」「創造力」「発信力」「傾聴力」「柔軟性」「状況把握力」「規律性」「ストレスコントロール力」の12の要素から構成されている。評価は3点法であり、3点：通常の状況で効果的にできた（見事にできた）・困難な状況でも発揮できた（とても難しかったが、なんとかできた）、2点：通常の状況では発揮できた（なんとかできた）、1点：発揮できなかった（どうしてもできなかった）とし、自己評価コメント（得点が1点または2点の場合）の自由記載欄を設けた。

### 2) 自記式質問紙調査票

(1) 対象の属性（年齢、性別、学年）(2) キャリア形成支援に関する内容（看護学実習経験、ボランティア活動経験の有無、アルバイト経験の有無と回数、就職・進学に関する活動経験の有無と内容）(3) キャリア形成支援に対する意見や要望の項目とした。

## 4. 分析方法

社会人基礎力自己評価については、各要素の平均点、標準偏差を算定した。前期と後期の比較はT検定（対応あり）を行い、社会人基礎力の自己評価コメントの自由記載内容については、12の要素ごとにKJ法を用いてカテゴリー化した。自記式質問紙調査票の内容は、基礎的集計をした。社会人基礎力の変化については、3つの力と12の能力項目ごとに前後のデータ

についてT検定（対応あり）を行った。統計ソフトはSPSS ver.24を使用した。

## 5. 倫理的配慮

研究対象者に調査の趣旨、個人情報保護、本研究以外の目的では使用しないこと、参加同意の自由、拒否時も教育や成績評価に不利益がないこと、データはコード化し、研究者の研究室の保管庫に保管し、研究終了後は速やかにシュレッターで破棄すること、調査票の回答をもって同意したこととする旨を文書及び口頭で説明した。

社会人基礎力自己評価表は記入後その場で回収し、自記式質問紙調査票については、用紙を配布後、対象者に準備した回収箱へ投函することを説明し、研究者はすぐその場を離れ、30分後に回収箱を回収した。所属大学の研究倫理委員会の承認を得て実施した。

## 6. 1年次におけるキャリア支援事業計画内容

キャリア支援事業については大学の就職支援委員会の事業に沿って実施している。4月就職ガイダンス、前期（4～6月）カレッジアドバイザーとの面談、9月進路希望調査、11月進学・看護専門職についての講話、後期（12～2月）カレッジアドバイザーとの面談を実施している。年間を通して、カレッジアドバイザーと学習面や生活面の相談・指導ができるような体制を整えている。継続的な支援をしていくために、看護学科独自の「面談シート」を作成し、面談終了後、カレッジアドバイザーが面談シートに面談内容を記録し、就職支援委員会が保管をしている。

## III. 結 果

対象学生の69名のうち、2回の調査に協力の得られた63名（回収率91.3%）を分析対象とした。

## 1. 社会人基礎力自己評価表について

### 1) 3つの能力の変化（表1）

社会人基礎力の「3つの能力」の前期から後期への平均値の変化は、『前に踏み出す力』2.19 → 2.34, 『考え抜く力』2.19 → 2.41, 「チームで働く力」2.42 → 2.62であった。（表1）T検定の結果『前に踏み出す力』（ $P<0.05$ ）, 『考え抜く力』（ $P<0.01$ ）, 『チームで働く力』（ $P<0.01$ ）で有意差がみられた。

### 2) 12の要素の変化（表2）

3つの能力の下位項目である12の要素のうち平均値の高かった要素は、前期では「規律性」2.62, 「傾聴力」2.60, 「柔軟性」2.57, 後期で

は「規律性」2.78, 「傾聴力」・「柔軟性」・「ストレスコントロール力」はいずれも2.68であった。

平均値が低かった要素は、前期は「発信力」2.02, 「働きかけ力」・「創造力」は2.10であったが、後期は「働きかけ力」2.27, 「主体性」2.29, 「計画力」・「発信力」がともに2.33であった。12の要素について前期と後期の結果を比較すると、12のすべての要素の平均点が後期に上昇しており、T検定において「実行力」「計画力」「創造力」「状況把握力」「規律性」が5%水準で、「発信力」「ストレスコントロール力」においては1%水準で有意差がみられた。また、前期と

表1 社会人基礎力自己評価値の変化（3つの能力）

(n=63)

3つの能力	前 期		後 期		t 値	p 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
前に踏み出す力	2.19	0.45	2.34	0.47	2.24	0.029
考え抜く力	2.19	0.43	2.41	0.43	3.50	0.001
チームで働く力	2.42	0.36	2.62	0.38	4.12	0.000
計	2.26	0.34	2.46	0.36	4.05	0.000

表2 社会人基礎力自己評価値の変化（12の要素）

(n=63)

3つの能力	12の要素	前 期		後 期		t 値	p 値
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
前に踏み出す力	主 体 性	2.22	0.55	2.29	0.55	0.68	0.497
	働 き かけ 力	2.10	0.59	2.27	0.65	1.75	0.086
	実 行 力	2.25	0.67	2.44	0.62	2.18	0.033
考え抜く力	課 題 発 見 力	2.34	0.57	2.49	0.56	1.59	0.118
	計 画 力	2.11	0.63	2.33	0.62	2.35	0.022
	創 造 力	2.10	0.64	2.40	0.66	3.01	0.004
チームで働く力	発 信 力	2.02	0.58	2.33	0.62	3.23	0.002
	傾 聴 力	2.60	0.58	2.68	0.50	1.04	0.301
	柔 軟 性	2.57	0.59	2.68	0.53	1.15	0.253
	情 況 把 握 力	2.32	0.56	2.52	0.56	2.42	0.018
	規 律 性	2.62	0.61	2.78	0.46	2.01	0.049
	ス ト レ ス コ ン ト ロール 力	2.39	0.69	2.68	0.50	3.62	0.001

後期の平均値の差は、「傾聴力」が0.08, 「主体性」が0.07であり, 「主体性」が最も差が少なかった。

3) 自己評価コメントの内容 (表3)

自己評価コメントの内容は前期では106個, 後期では158個が記載されていた。前期から後期への変化を見ると『前に踏み出す力』41→73個, 『考え抜く力』30→41個, 『チームで働く力』35→44個であり, 後期に記載量が

増加していた。内容を見てみると『前に踏み出す力』の「主体性」では<自信がない・流される>, 「働きかけ力」では<伝えるのが苦手><自分のことで精一杯><他人任せだった>, 「実行力」では<失敗したくない><途中であきらめることがあった>などがあった。『考え抜く力』の「課題発見力」では<目の前のことで精一杯><課題の把握ができなかった>, 「計画力」では<計画性なし><実行できる計画が

表3 社会人基礎力自己評価コメントの自由記載内容

3つの能力	12の要素	前 期		後 期	
		カテゴリー	記載数	カテゴリー	記載数
前に踏み出す力	主体性	自信がない・流される 迷いが多かった	14	自信がない 他者に流された	33
	働きかけ力	伝えるのが苦手 影響力無し・逃げる 自分のことで精一杯	16	上手く伝えられなかった 他人任せだった	20
	実行力	途中であきらめることがあった 失敗したくない 苦手は後回し	11	粘り強さがなかった 失敗を恐れ行動できなかった	20
考え抜く力	課題発見力	目の前のことで精一杯 方向性を間違えた 情報収集が苦手で積極的になれない	8	課題の把握できなかった 課題の分析ができなかった	8
	計画力	計画性なし 計画修正ができない 効率よくできるよう視野を広げたい	16	実行できる計画が立てられない	20
	創造力	創造力がない 自分で考えていない 新しいものを生み出そうとする 意欲が不足	6	あまり考えていない 新たなことに目を向けられなかった 与えられたものをやるので精一杯	13
チームで働く力	発信力	伝えるのが苦手 上手く伝えられない	14	わかりやすく伝えられない	14
	傾聴力	集中して聞けない	6	受け入れられないことがあった	5
	柔軟性	わかっているけどできない	2	少しできるようになった	3
	状況把握力	良い方への転換が厳しかった 意識してなかった	3	周囲の状況を見ていなかった 期待されることにうんざり 他人任せ	8
	規律性	守れず迷惑かけている	4	時間を守れなかった	3
	ストレスコントロール力	ストレスがたまったら 体調不良になる	6	ストレスがたまったら からだに影響した	11
合 計			106		158

立てられない>、「想像力」では<自分で考えていない><創造力がない>などの記載があった。『チームで働く力』の「発信力」では<伝えるのが苦手><わかりやすく伝えられない>、「傾聴力」では<集中して聞けない><受け入れられないことがあった>、「柔軟性」では<わかかっていてもできない>、「状況把握力」では<意識してなかった><期待されることにうんざり>、「規律性」では<守れず迷惑をかけた>「ストレスコントロール力」では<ストレスがたまった><からだに影響した>などの記述があった。

## 2. 自記式質問紙調査票について

### 1) 対象の属性

対象の属性は、男性9名（14.3%）女性54名（85.7%）、年齢は18歳～24歳、18～19歳59名（93.6%）、20～21歳2名（3.2%）、24歳2名（3.2%）であった。

### 2) キャリア形成支援に関する内容について

#### (1) 看護実習を通してキャリア形成への影響について

「ある」が11名（17.5%）、「ない」が52名（82.5%）であった。「ある」の11名中7名の記載内容は、「自分の向き不向きを実感」「コミュニケーション力上昇」「精神的に少しだけ強くなったと感じる」「流れがつかめた」「演習」「看護師の役割が分かった」「もっと勉強して知識を身につけたいと思った」であった。

#### (2) ボランティア活動の経験について

「ある」が30名（47.6%）、「ない」33名（52.4%）であった。内容は、健康調査が30名、オープンキャンパスのサポートが7名、災害ボランティア4名、障がい者施設でのイベントが1名であった（複数回答）。

#### (3) アルバイトの経験について

「ある」が48名（74.2%）、「ない」が15名（23.8%）で、アルバイト期間は1か月から36か月までであった。

#### (4) 就職、進学に関する活動について

「ある」が4名（6.3%）、「ない」が59名（93.7%）であった。活動内容は、病院の奨学生募集面接やインターシップであった。進学に関する活動内容については、「ある」が2名（3.2%）で「ない」が61名（96.8%）であった。活動内容として1人が進学先の検討と回答していた。

3) キャリア形成支援に対する意見や要望  
「まだよくわかりません」「病院の情報がほしい」の2件の記載があった。

## IV. 考 察

職場や地域社会でさまざまな人と共に仕事をしていくために必要な基礎的な力として「社会人基礎力」を高めることが必要であり、看護職にも必要な力であると考え。今回の調査の、社会人基礎力自己評価の結果を見ると、3つの能力の平均値が後期に上昇しており、『前に踏み出す力』（ $P<0.05$ ）、『考え抜く力』（ $P<0.01$ ）、『チームで働く力』（ $P<0.01$ ）の3つの能力の全てで有意に高くなっており、全体として社会人基礎力が上昇していた。このことは、学生としてのさまざまな体験が上昇の要素となったのではないかと考える。

社会人基礎力の12の要素については、「創造力」「発信力」「ストレスコントロール力」においては1%水準で、「実行力」「計画力」「状況把握力」「規律性」においては5%水準で有意差が見られ、後期の平均値が高くなっていることが分かった。平均値の差が低かったのは「主体性」「傾聴力」「柔軟性」であった。

調査の自己評価コメントをみると、記載数は前期が106個で後期が158個で増加しており、徐々に自分の意見を表現できるようになってきていると考える。記載内容を見てみると『前に踏み出す力』では、自信がなく、失敗したくないため途中であきらめてしまうと振り返っていた。『考え抜く力』では、課題についての思考や、計画立案への対処方法を上手にできていない、また『チームで働く力』では、他者との関係作

りが苦手、素直に受け入れられず、ストレスを感じやすいといったことを振り返っていた。これらから、失敗への恐れや、他者との関係構築に不安が強いという学生の傾向がみられていたため、課題へ取り組む姿勢や乗り越えるためのサポートが必要であると考えた。

大学1年次は、大学生活に慣れる、さらに専門分野に向かうための入り口で看護の基礎について学ぶ時期であり、8月には初めての基礎看護学実習を経験している。さらに看護実習がキャリア形成に影響があったかどうかの問いには、「ない」と回答している学生が52名(82.5%)と多かったことから、学生は看護学実習がキャリア形成に大きく影響することを意識していないと思われる。しかし、看護学実習は対人関係を育成する重要な要素であるため、自己の姿勢や職業を改めて考える機会であることを意識していけるようにかかわっていく必要がある。

ボランティア活動については、約半数の学生が経験していた。最も経験の多かった健康調査は不特定多数の住民を対象としており、「柔軟性」や「傾聴力」を養う要素と考えられる。ボランティア経験については、参加意義ややり遂げた経験の積み重ね、他者から受け入れられることだけでなく、自分自身を振り返り自己受容が肯定的に影響し自己効力感と社会人基礎力の向上に効果がある<sup>8)</sup>。また、アルバイトの経験については、74.2%の学生が経験していた。中でも12名の学生は大学入学以前からアルバイトを継続していた。アルバイトは学生にとって身近な仕事体験であり、仕事体験を通してキャリア形成が期待でき社会性の発展が促進される<sup>9)</sup>。本研究においても「実行力」「計画性」「状況把握力」が上昇していることから、ボランティアやアルバイトを経験していることが『前に踏み出す力』に反映していることや、平均値の上昇に影響していることが考えられる。アルバイトについては看護師としての自分の適性の判断や社会性の発展につながる反面、学費をアルバイトで補う学生に対しては、アルバイトと学業

を両立し、悪影響を与えないよう自己管理していくためのかかわりが必要である<sup>10)</sup>とが示唆されていることから、今後ボランティアやアルバイトをする上で、学生自身が学業以外の生活管理ができるような教育も必要と考える。

進学・就職に関する活動をしている学生は少数であった。キャリア支援内容の意見要望に「まだよくわからない」「病院の情報が欲しい」や、社会人基礎力自己評価のコメントに「目の前のことで精一杯」「計画的に実施できなかった」などの記述が多数あり、看護職への適性や看護職として仕事をしていくということをじっくり考えるところまでは到達していないと思われる。学生の就職活動の促進のためには、どこに就職するかを最初に検討するのではなく、自分は何を目指しているかを明確化し、なるべく早く職業的アイデンティティの育成を意識しかかわることが重要である<sup>11)</sup>。これらのことから、看護職として働くことのイメージがよりよく作られるように、さまざまな体験を通して主体的に行動できるように支援していく必要がある。

今回の調査では、社会人基礎力の12の要素の中で「主体性」「傾聴力」「柔軟性」の平均値の伸びが少なかったため、今後、他者に流されることなく、自信を持ち行動できることが主体性の向上につながるとと思われる。物事に進んで取り組む力である「主体性」が発揮されれば「働きかけ力」「実行力」を生み他の要素が主体性の影響を受ける<sup>12)</sup>。社会人基礎力の発揮について学生に考えさせ、活動の振り返りを繰り返すことが重要であると考えた。さらに目の前のことだけではなく、看護職への理解を深められるように、情報提供をしていくことが大切である。社会人基礎力は学生が意識し行動することで、大学以外の場でも伸ばすことが可能になることから、定期的に社会人基礎力自己評価を行い、学生が意識する機会をもてるように、かかわっていくことが必要であると考えた。

## V. おわりに

1. 社会人基礎力の自己評価の平均値は、3つの能力と12の要素のすべての項目で、前期よりも後期に上昇していた。看護学実習、ボランティア活動など、さまざまな体験は社会人基礎力向上に必要な要素である。

2. 他者とのかわりが基本となる看護職へのキャリア形成のためには、看護学実習体験は重要であるため、学生自身が看護学実習を通して、キャリア形成へ意識が高められるようなかわりが重要である。

3. 学生が主体的に行動し、社会人基礎力を高めていけるように、定期的に自己評価の機会を設けることが必要である。

## 謝 辞

本研究の実施に当たり調査にご協力いただきました看護学生の皆さんに感謝申し上げます。

## 引用参考文献

- 1) 通商産業省：社会人基礎力とは、HP <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>（2017年1月8日検索）
- 2) 其浦とき子：特集これからの医療を見据えた看護基礎教育変革の方向 PBL教育が学生の社会人基礎力を高める，看護展望，42(8)，31-33，2017.
- 3) 梅川奈々他：日本看護学会論文集，看護教育，45号，98-101，2015.
- 4) 鈴木良美他：「自然体験学習」が看護学部学生の社会人基礎力に及ぼす有効性の検証，東邦看護学会誌，No. 13，37-41，2016.
- 5) 曾根志穂他：被災地ボランティア活動が看護学生の自己イメージと社会人基礎力，自己

効力感に与える影響と学生の思い，石川看護雑誌，No. 12，115-125，2015.

- 6) 若杉早苗，松井謙次他：看護学部学生の学業とアルバイトに関する実態調査，聖隷クリストファー大学看護学部紀要，No. 24，33-45，2016.
- 7) 原田宏枝他：看護学生のキャリア志向とキャリア開発支援に関する研究，九州大学医学部保健学科紀要，vol. 7，13-22，2006.
- 8) 前掲5)
- 9) 関口倫紀：大学生のアルバイト経験とキャリア形成，日本労働研究雑誌，52(9)，67-85，2010.
- 10) 前掲6)
- 11) 濱田雅子，二重作清子：看護大学生へのキャリア支援の取り組みと課題，純真学園大学雑誌，No. 4，95-105，2015.
- 12) 近藤昭子：看護職としての社会人基礎力と3か月・1年目の行動目標，日本看護協会出版会，2012.
- 13) 箕浦とき子，高橋恵（編）：看護職としての社会人基礎力の育て方—専門性を発揮を支える3つの能力と12の能力要素—，日本看護協会出版会，2012.
- 14) 吾郷美奈恵他：看護基礎教育におけるキャリア支援と評価，島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要，4，76-79，2010.
- 15) 濱田雅子，二重作清子：看護大学生へのキャリア支援の取り組みと課題，純真学園大学雑誌，4，95-105，2014.
- 16) 池田健治，山崎紅：社会人基礎力講座，日経BP社，2015.
- 17) 社会人基礎力に関する研究会：社会人基礎力に関する研究会「中間とりまとめ」（概要版），2015.
- 18) 学校法人河合塾：社会人基礎力のさらなる普及と育成プログラムの効果検証，<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/> 2011.2（2017. 12. 18 検索）